

1. 計画の背景と目的

1-1. 町屋を取り巻く現状

●町屋は近年、取り壊しが進み、急速に減少しつつある。しかし一方で、町屋を“地域の貴重な宝”として捉え、再評価するとともに、積極的に活用することによって、暮らしやすいまちを再生しようという取り組みが展開されている。

- ・町屋は、藩政期より住まいと生業が共存する場として、人々の暮らしが営まれてきており、戦災を逃れた京都や金沢、そして大聖寺でも多くの町屋が残されていた。しかし、近年では、建物の老朽化や現代生活に合わないなどの理由から、取り壊しが進んでおり、町屋が急速に減少しつつある。
- ・しかし、町屋が消失する一方で、京都市などでは、京町家の伝統的な価値を再認識し、保存や継承に向けた取り組みが見られ、伝統的建築様式による外観を継承しつつ、内部を商業店舗やコミュニティ施設などに活用・再生する動きが大きなムーブメントとなって、全国に波及している。
- ・また、国でも「町家の活用・再生ガイドライン（H16.12）」を定め、全国の都市に存する町家等の伝統的工法による木造建築物（町家等）の再生・活用を促進し、良好な景観の形成等による都市再生や地域の活性化を進めるため、町家等の再生・活用や町家等を活かしたまちづくりを推進している。
- ・こうした町屋を取り巻く動向は、現在残されている町屋を“地域の貴重な宝”として捉え、再評価するとともに、積極的に活用することによって、中心市街地の活力低下や地域コミュニティの崩壊などの地域が抱える諸問題を解決し、暮らしやすいまちを再生しようという考え方に基づくものであり、21世紀における都市再生の一つのあり方として定着しつつある。

1-2. 計画策定の目的

●城下町の町割りや暮らしの文化を継承してきた加賀市大聖寺地区において、「歴史的景観の維持」、「良好な居住環境の実現」、「まちなかの賑わい創出」に向けた町屋ストックの再生方策について検討することを目的とする。

- ・大聖寺地区は、江戸時代の町割りがそのまま残り、現在も城下町としての面影を残す町並みが形成されている。
- ・当地区は、昭和50年代までは市の中心として栄えていたが、その後郊外型店舗の進出、車社会の到来などにより、古い町ゆえに中心市街地が徐々に衰退しており、さらに高齢世帯の増加と家屋の老朽化などによって空き家が増加し、古い町並み景観やコミュニティの維持が危ういなど、地域の活力が低下している状況である。
- ・本計画は、城下町の町割りや暮らしの文化を継承してきた加賀市大聖寺地区において、「歴史的景観の維持」、「良好な居住環境の実現」、「まちなかの賑わい創出」に向けた町屋ストックの再生方策について検討することを目的として策定するものである。

1. 計画の背景と目的

1-3. 検討対象とする町屋の定義

- 「戦前に建てられた建物」のうち「町屋の建築様式を有するもの」を主とし、「武家屋敷の建築様式を有するもの」も含み「町屋」と称し、検討の対象とする。
- 「町屋」は、本来「町家」と呼ばれているが、大聖寺地区においては、八百屋や酒屋、御菓子屋などの商業活動の場としての活用・再生も目指すことから「町屋」と表す。

町屋の建築様式を有する建物（例）	武家屋敷の建築様式を有する建物（例）
	

1-4. 検討対象区域

- 大聖寺川、JR北陸本線、大聖寺川および錦城山で囲まれた区域（約230ha、下図の一点破線で示す範囲）を検討対象として設定する。

